

百回の嘘と ひとつの真実 石川憲二

※『週刊ポスト』（小学館）一九九八年九月二十五日号に
掲載された作品に加筆したものです。

「まず、これを見ろよ」

丸の内のビルの地下にあるバー。オフィス街にありながら隠れ家のような雰囲気の中で常連客が多く、会社の上司と顔をあわせる心配は少ない。しかも一角に葉巻を楽しめるシガーコーナーがあるせいか女性客でいっぱいになることもなく、男同士の密談場所としては最適な場所だ。遅れてやってきた石神健一は、この手の店に多い外国人ウェイトレスの豊かな身体をきよきよと追っていた内山次郎の視線を遮るように一冊の雑誌を開いて見せると、向かいのシートにどかと座った。次郎は誌面に目を移す。

「えーと、医師、弁護士、企業経営者限定のスペシャルパーティー。参加条件は年収千万円以上……。なんだ、こりゃ？」

「いわゆるお見合いパーティーってやつだよ。これは『J』という旅行情報誌なんだが、最近旅の話よりも、この手の告知が多いことで有名になっている」

「お見合いなんて、俺はまだ結婚する気なんかないぞ」

「そういうことじゃないよ。とりあえずこの値段を見しろ」

「なんだって！ 男性四千元に女性が一万円。普通、パーティーの参加費って男のほうが高いんじゃないのか？」

「たしかに参加条件の厳しくないパーティーでは、男が四千元ぐらいで、女性は二千元

以下か、なかにはタダつてのものもある。しかし男性のステータスが高くなればいろいろ状況は変わり、場合によっては逆転もありえるってことよ」

そこまで話すと、健一は運ばれてき生ビールをぐっと飲み、続けた。

「いいか。女が一万円払ってでも参加するっていうのは、要するに、それだけ相手を求める気持ちが強いってことだ。だからこそ、遊び相手をみつけるには絶好だろ。もちろん結婚するしないは本人の勝手。どうだ」

「でも、俺たちは医者でも弁護士でもないぞ。事務機器の営業マンなんて、まったく参加条件をクリアしてないだろ」

「まあ、そう焦るな。方法はいくらでもあるさ。なにしろ俺は、このやり方ですでに何度もいい思いをしてるんだからな」

不安そうな表情をする次郎の肩を、健一は意味深な笑顔で、ぐっとつかんだ。

パーティー参加に必要な小道具

次の日曜日、次郎は緊張した面もちで六本木に近いシティホテルのロビーに立っていた。健一に言われた通りブランドもののスーツを着込み、靴もぴかぴかに磨いてある。

「服装はどうか合格だな」

ダブルのジャケットを着た健一がにやけながら近づいてきた。そしてブリーフケースから書類封筒を取り出す。

「いいか、よく聞けよ。今日、おまえは弁護士の安永康宏先生になる。ほら、これが名刺だ。事務所の連絡先は日曜日は留守番電話になっている法律事務所だから今日一日はバレない。あとは、うまくやれ」

「なんだって！ 身分を詐称するのか？ それって犯罪だろ？」

「大丈夫。ここのパーティーはけっこう審査がゆるくて、自分の名刺を三枚以上もっていけばいいんだ。もちろん名刺だから公文書偽造にはならない。また、ここが大事なポイントなんだが、たとえ身分を偽って男女が親しい関係になったとしても、最終的に結婚さえしなければ詐欺にはならない。恋愛はあくまで法律外の行為だからな」

「そうかもしれないが、そこまで、どうやって話合わせるんだ？」

「おまえ、法学部出身だろ。学校で習ったことをつなぎ合わせていけばどうかなるさ。あ、それから俺は北海道の大きな病院の御曹司ってことになってるから声かけるなよ」

そこまで説明すると、健一はさっさとエレベーターのほうに向かう。途中で思い出したように振り返り、次郎を手招きした。

「忘れてた。これは今日のスペシャルプレゼント。うまく使えよ」

手わたされたのはホテルのルームキー。その重さに、次郎はあとに引けない重圧を感じていた。

パーティーはホテル八階の宴会場で三時から始まった。

受付で名刺を出し、適当な住所を書いたとき、次郎は緊張で汗をかく。

「こんな態度じゃ嘘だつてバレるぞ……」

心配になり、思わずまわりを見回すが、他の参加者もお見合いパーティーということで一様に堅くなっているせいか、おどおどした態度は自分とあまり変わらない。健一の「大丈夫だ」という自信にあふれた声が急に現実的なものに感じられてきた。

会場は普通の立食パーティーと同じだ。目新しいのは向かい合うようにセッティングされたテーブルが四つ置かれていることだけ。その上にはAからDまでの立て札がある。「みなさん、今日の参加者は男女とも二十人ずつとびつたりです。きっと成功率も高いですよ」

主催者のあいさつのあと、簡単にルールが説明された。参加者は会場に入った段階で男性も女性もそれぞれ五人ごとの四つのグループに分けられており、各自1から4までの番号札を渡されている。そしてグループごとに最初はA、次はBと、指定されたテーブルの席に着かなければならない。最初は向かい合った男女が話をし、合図とともにひとつずつ席をずらしながら、最終的に異性全員に対して一分ほどの自己紹介をしていく。それを繰り返すことで全員が顔合わせをできるという算段だ。

決められているのはそれだけで、あとは基本的にフリータイムだという。

「実に合理的なシステムだな」

次郎はこのようなパーティーを企画した人間に感心してしまう。また短いアピールなラ嘘がバレる心配がないのも都合だった。

「これなら、なんとかなりそうだ」

もちろん慎重派の彼は、こんなところで女性とうまくいくと考えているわけではない。とりあえず、身分を偽ったままでも無事にパーティーを終えられそうだという安心感に、余裕のある表情をとり戻した。

近づいてきた女性は

「スチュワードス」

自己紹介はスムーズに進み、三十分ほどで終わる。その間、次郎は対面するひとりひ

とりの女性に仕事のことなどを含め五つ以上の嘘をついた。最初は良心がとがめたが、どんな嘘でも繰り返していくうちにだんだんストーリーができてくるもので、最後のほうはすっかり話し上手になつていく自分の悪党ぶりに驚いたほどだ。

ただ残念なことに、二十人もの女性とがんばって接したというのに、「これは！」と思える相手はわずか二人しかいなかった。ひとりは雑誌モデルをしているというスタイル抜群の二十三歳の美女だが、派手な彼女とはあまり話が合わなそうだ。もうひとりは航空会社のキャビンアテンダントだという黒いワンピースを着た二十五歳の小柄な人。陽に焼けた顔に、くつきりとした瞳がよく似合う。スチュワーデスなんて次郎にとって高嶺の花なので普通ならおどおどしてしまうのだが、なぜか彼女とは緊張感なく話できた。

そしてフリータイム。高澤礼子と名乗った航空会社の女性が向こうから声をかけてくる。その積極的な態度にどぎまぎしながらも、気さくな会話に引き込まれていった。小柄な身体が次郎に自信をあたえたのか「このあと、ちょっと飲みに行きませんか？」という誘いも自然に出る。

「けっこう慣れてるんですね。すぐに女性を誘うなんて」

「いや、こういう席は初めてなんです。ただ、あなたとはもっと話がしたくて」

「そう……。じゃあ、OKです」

彼女の返事に照れて視線を外すと、健一が女性参加者のなかではナンバーワンの美女である雑誌モデルと会場を出ていくのが見えた。

「も、もう、出ませんか？」

次郎は少しあせった声で言う。

「そうね。これ以上、ここにいってもしかたがないみたいだし」

礼子は合意すると、飲みかけていたグラスをテーブルに置き、次郎に腕をあずけて歩き出した。

街の灯に 照らされたもの

「先にシャワーを使っていいい？」

夜八時、次郎と礼子は、健一にもらったルームキーに書かれていたホテルの客室にいた。彼女は会話をするともなく、ハンドバックを抱えてさつさとバスルームに消えていく。

パーティーのあと、二人はホテルのレストランで軽い食事をし、最上階のバーで少し飲み直した。そしてエレベーターで降りてくるときに次郎は思い切って客室のある階のボタンを押す。礼子は視線をそらす、ドアが開くと黙って着いてきた。

続いて次郎がシャワーを浴び、部屋に戻ると、すでに照明はスタンドだけになっている。礼子はベッドの中からじっと男を見ていた。

「ね、どうしてこんなに急ぐの？」

「え？ 君が好きになったから」

「それは裸の私？ それともスチュワードだっていう女？」

「君に決まってるだろ。それに嘘はない！」

「嘘はない、か……」

もうあと戻りはできない。次郎はガウンを床に落とすと、ベッドに突進し、礼子の身体を毛布ごと思い切り抱きしめた。

「あせらないで！ まだ私たちには時間はたっぷりあるんだから」

それは二人が結婚するという意味なのだろうか。次郎はちよつと躊躇する。しかし礼子は意に介さず、上半身を起こすと、スタンドの明かりを少し弱くしてから、黒いブラとショーツを脱いで再び毛布にくるまった。

わずかに女の顔が見える明るさの下で次郎は礼子にキスをする。髪から名前の知らない香水の匂いがした。がまんできずに彼女の上のしかかる。やがて二人は激しい欲望のなかに沈んでいった。

深夜、満足しきった顔で眠っている礼子を置いて、次郎は部屋を出ようとしていた。静かに服を着て、靴を履く。そのとき、身体がよろけてテーブルの上にあった彼女のハンドバックを床に落としてしまった。化粧品とともに身分証明書が現れる。窓から入る街の灯りで「……生命保険……赤坂支店……営業スタッフ……田中礼子」という文字がかすかに読めた。あわててバッグを元に戻す。

「もう行っちゃうの？」

気配で目を覚ましたのか、彼女が声をかけてきた。部屋が暗かったせい、そこまで行動には気づかれていないようだ。

「ごめん、明日早いんだ。精算はすませておくから朝までいていいよ」

「裁判か何か？」

「そ、そうなんだ。いろいろ準備があつて」

「私は……。今日は特別な日だから、ここにいてその余韻に浸るわ。幸い、明日はフライトないし」

ドアのところまで進んだところで次郎は考える。そして、もう一度、声をかけた。

「また、連絡してもいいかな？」

礼子は「え？」と驚く。

「どうやって？」

「方法はあるさ。今度は普通の日に、普通に会おうよ」

「いいの？」

「いいさ。僕も普通の自分を見せなくなったから」

すると、礼子は裸のまま静かにベッドを出て次郎のところまで歩き、抱きついてきた。

「いいよ、今すぐになでも。本当のあなたを見せてよ」

「え？」

「あのさあ、シャワー浴びるとき、荷物はちゃんともっていったほうがいいよ。誰が、中のもん見ちゃうかわからないから」

二人は一瞬の沈黙のあと笑うと、今日一日でいちばん深いキスをした。